

日本語におけるとりたて助辞の意味と文法

——「さえ」について

朱 武平

0. はじめに

日本語のとりたて表現は主に2種類の形式があるとされている。一つは「特に、もっぱら」などのような副詞¹によるとりたてで、もう一つは「だけ、ばかり、こそ、さえ」などの助辞によるものである。本稿では、後者のとりたて助辞²を対象とし、「さえ」をとりあげて考察する。

とりたて助辞に関して、さまざまな形で研究がなされてきている。それを大きく二つに分けると、ひとつは文法的、形態的に、分布<distribution>に従って捉える、いわゆる「副助詞」「係助詞」³としての研究と、もうひとつは意味、機能に注目して、それらを一括して「とりたて助辞」として捉える研究である。前者は、主として山田孝雄 1936 の分類に従っていると考えられ、後者は宮田幸一 1948、鈴木重幸 1972、寺村秀夫 1991、沼田善子 1986 などがあげられる。

山田孝雄 1936 では「格助辞」、「副助辞」、「係助辞」について「この三種は各その特質ありて、決して混同せらるものにあらず。而してこれら三種が相重ねて用ゐらるゝ場合にも一定の規律あり相犯すことなきものなり。」と述べ、「格助詞」、「副助詞」、「係助詞」の間の相互承接のしかたを規定している。

「とりたて助辞」として捉える研究では、宮田幸一 1948 が、「取立て助詞」という言葉を初めて使い、のちに鈴木重幸 1972 によってとりあげられる。鈴木重幸 1972 は「とりたての形は、主題の提示や文の部分の強調などの機能をもはたす」と指摘し、「第一種のとりたてのくつつき」(係助辞)と「第二種のとりたてのくつつき」(副助辞)と分類する。

本稿ではとりたて助辞研究の過程として調査した「さえ」について、とくに格との接続に重点を置き、その文法的特徴をあきらかにし、今後のとりたて助辞全体の研究の基礎をつくることを目的としている。

なお、用語に関しては、本稿では「とりたて助辞」という用語に統一し、「さえ」の文法的特徴を考察するにあたって、とりたて助辞の下位分類「係助辞」「副助辞」に従うことを先に断っておきたい。

1. とりたて助辞「さえ」の意味と用法

「さえ」について、寺村秀夫 1991 は「XサエP」はXに「サエ」を付けることによって生じる影は、〈Xは、Pで表される動作、できごと、状態などと、普通は結びつかない、あるいはめったに結びつかないものである〉ということである。(中略)「XサエP」を言うことによって、その文脈で言おうとしているなんらかの事態の(程度の)異常さを相手に印象づける効果が生じる」としている。

沼田善子 1986 は「さえ」を「さえ₁」と「さえ₂」に分けており、「さえ₁」について、「他のものはともかく、こんなものまでも」といった強調」と説明し、「さえ₂」は、「さえ～すれば」の条件形で、事態を成立させるために必要最低限の条件を出し、それだけで十分だ、他はいらない、あるいは問題にならないという意味で、最低条件をあらわすとしている。本稿では「さえ」の接続のパターンのみをあつかうので、それぞれの助辞の意味の違いについては稿を改めたい。

2. 連用格の接続⁴

とりたて助辞「さえ」の文法的用法、主として他の助辞との接続について考察する。方法としては、小説、雑誌など文学作品からおおよそ 500 近くの作品から用例を収集し、これらの用例を基に「さえ」と他の助辞との相互承接を以下の格助辞、副助辞、係助辞(「さえ」を除き他の係助辞)の順に、可能な組み合わせのパターンを割り出し、それを実例から確認できたすべてのパターンとつきあわせ、その出現の傾向について考察する。

格助辞 連用格「が、を、に、へ、で、と、から、まで、までに」

連体格「さえ」+「の」

副助辞「くらい(ぐらい)・ほど・だけ・ばかり・など・なんか」

係助辞「は・も・こそ・しか・でも・まで・なんて」

2.1 格助辞+「さえ」

「さえ」は格助辞と接続する場合、格助辞は「さえ」のまえにつくことができる。この場合は、格助辞+「さえ」の形になる。

2.1.1 をさえ

格助辞「を」+係助辞「さえ」の形で「をさえ」になる。

(1) 汽車という汽車のなかで、その夜の九時十五分東京駅発下関行急行——私がそれに何らの必要もなしにほとんど先天的な約束をさえ見出しかけていると、彼女も眠れないとみえて、下の寝台で

寝返りを打つのが聞えた。(踊る地平線)

(2)夕闇は段々深まって行った。事務所をあずかる男が、ランプを持って来た序に、夜食の膳を運ぼうかと尋ねたが、私はひょっとすると君が来はしないかと云う心づかいから、わざとそのままにしておいて貰って、またかじり付くように原稿紙に向った。大きな男の姿が部屋からのっそりと消えて行くのを、視覚のはずれに感じて、都会から久しぶりで来てみると、物でも人でも大きくゆったりしているのに今更ながら一種の圧迫をさえ感ずるのだった。(生れ出づる悩み)

(3)そこに、黄色い黒い顔の、眼の吊り上った、針金みたいな黒髪の異形な人物の映像がありありと写っているからだ。が、入り代り立ちかわりする外来者が、南あめりか森林地帯で捕獲された不運な小動物——学名未詳——を見学するときの、明白な好奇心と多少の不気味さをあらわした眼をもって、いくら斜めに——正面から凝視することはこの怪人を激怒させるかも知れない。そして犬や猫をさえ激怒させるようなことはしないのが英吉利《イギリス》の紳士だから——見ようと、その映像の本尊たる私は平気以上に平気だ。(踊る地平線)

2.1.2 にさえ

格助辞「に」＋係助辞「さえ」の形で「にさえ」になる。

(4)——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥れて見たいような気になさえる。(羅生門・鼻)

(5)古本屋のおやじは一日いっぱい往来へ出て両手をうしろへ廻し、空を見上げて天気の予言に夢中だ。通りすがりの御者の鞭《むち》が一ばんあぶない。びゅうっと唸っておやじの丸帽子を叩きおとし、掛声を残して行ってしまうと、鷲鳥《がちょう》のように追っかけてようよう拾った帽子を袖で払いながら、あとからおやじが真赤になって唸鳴っているが、町の人々の笑い声でそれはおやじ自身にさえ聞えない。(踊る地平線)

(6)家の中は切詰めるだけ切詰めて、於勝の嫁入支度も直道の晩酌も棚上げになり、時には薬にさえ事欠き芋粥で何日も過すような暮しをしながら、家内に陰惨な貧しさの影が見えないのは、一家をあげて京都へ出ている雲平に望みを託しているからであったが、その他にも於継の若さ美しさというものがどのくらい家の者の力づけになっただか分からない。(華岡青洲の妻)

2.1.3 へさえ

格助辞「へ」＋係助辞「さえ」の形で「へさえ」になる。この形の実例は以下の一例のみしか見られなかった。

- (7)「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手にあるける通行券です。(銀河鉄道の夜)

2.1.4 できえ

格助辞「で」＋係助辞「さえ」の形で「できえ」になる。

本稿では「できえ」の「で」を格助辞の「で」として扱ったが、この組み合わせはコピュラ「だ」の連用形が「さえ」によってとりたてられているという考えもあり、実例からは判断することが難しい。また、「でも」というとりたて助辞が成立していることから、「できえ」もひとまとまりのとりたて助辞とみたほうがよいのではないかと考えてしまう。だが、明確な境づけは即席にできるものではないため、さしあたって本稿では、全ての「できえ」を格助辞「で」＋係助辞「さえ」のくみあわさったものと捉えることとする。また、この後にみる、「できえが」、「できえも」、「だけでさえ」についても、同様の扱いをする。

- (8)土の結合力が弱ければ、石はもちろん、粘土できえ飛ばないような微風によっても、砂はいったん空中に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。(砂の女)

- (9)しかし私の顔は、妻できえ識別できないほど変形を来たしていた(黒い雨)

2.1.5 とさえ

格助辞「と」＋係助辞「さえ」の形で「とさえ」になる。格助辞「と」＋「さえ」の用例は一例しか見られず、この形では、「とさえ」(聞く)、「とさえ」(思う)などの引用例が多く見られる。

- (10)しかし、かれらは、作業の内容について、同じ職場の同僚たちとさえ話合うことは固く禁じられていた。それに、宣誓書に記されていたいかめしい文章も絶えずよみがえってきていて、いつの間にかかれらは、沈黙という習慣になじんでしまっていた。(戦艦武蔵)

また、本稿では以下のような引用例を扱う対象からはずしている。

言語活動

- (11)つまり、職人が手で造った物だから恐ろしく贅沢である。従って値段も高いという意味なのだ。

この言い草はわれわれ日本人には不思議に響くけれど、機械製品に飽きている向こうの連中には

この上なく有難いとみえて、ことに亜米利加《アメリカ》人なんか「|手作り《ハンド・メイド》」
とさえ聞けば、どんなに桁《けた》はずれな高値をも即座に肯定して、随喜の涙とともに否応《いやおう》なしに買い取って行く。

思考活動

(12)彼が、人生の門出に際して、モーツァルトに対して抱いた全幅の信頼を現した短文は、洞察と陶酔との不思議な合一を示して、いかにも美しく、この自己告白の達人が書いた一番無意識な告白の傑作とさえ思われる。(モーツァルト)

2.1.6 からさえ

格助辞「から」＋係助辞「さえ」の形で「からさえ」になる。

(13)私は彼の研究業績、研究能力、異常なまでの研究中心主義、およびそこから生ずる他の面での利己主義をも含めて、ほとんど感動に近い尊敬の念を持っていた。この世界的大数学者の一挙手一投足からさえ何かを学ぼうと、あらゆる注意を払っていたものだ。(太陽のない季節)

(14)打ち寄せる波を見ているうちに、眠気が襲ってきた。仕事からも先輩からも解放されて、波の音を聞きながら目を閉じると、なんともどこかでいい気分だ。至福というやつかもしれない。将来とか未来からさえ解放された時間だった。(自転車夏)

2.2 「さえ」＋格助辞

「さえ」は格助辞と接続する場合、調べた限りでは「さえが」、「さえを」のように、格助辞の前にくる場合が見られた。係助辞は格助辞の前につくことがないとされているが、「さえ」は係助辞として振る舞いながらも、副助辞的な特徴を持つと考えられる。

2.2.1 さえが

係助辞「さえ」＋格助辞「が」の形で「さえが」になる。

(15)ぎょっとして気が付くと、その船はいつの間にか水から離れていた。波頭から三段も上と思われる辺を船は傾いだまま矢よりも早く走っている。君の頭はかーんとして竦み上ってしまった。同時に船は段々大きくぼやけて行った。何時の間にかその胴体は消えてなくなって、唯真白い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見やられるばかりだ。と思う間もなくその白い大きな帆さえが、降りしきる雪の中に薄れて行って、やがてはかき消すように見えなくなってしまった。(生れ出づる悩み)

(16)ナオミを「偉くすること」と、「人形のように珍重すること」と、この二つが果して両立するも

のかどうか?——今から思うと馬鹿げた話ですけど、彼女の愛に感潮して眼が眩んでいた私には、そんな見易い道理「さえが」全く分らなかったのです。(痴人の愛)

2.2.2 さえを

係助辞「さえ」＋格助辞「を」の形で「さえを」になる。

「さえを」については、集めた用例を見た限り、「さえをも」の形だけしか見られず、「さえを」の用例は一例もなかった。だがこの「さえをも」の形があることから「さえ＋を」の形も成立すると考えられる。「さえをも」については後に説明する。

2.3 「さえ」＋他の係助辞

「さえ」は他の係助辞と接続する場合、事例には「さえも」の組み合わせしか見られず、調べた限り「も」以外の係助辞と重ねて用いられることはなかった。よって、他の係助辞が「さえ」の後に来ることは考えにくい。

2.3.1 さえも

係助辞「さえ」＋係助辞「も」の形で「さえも」になる。

(17)ピストルの音「さえも」かつて一度として聞えたことはなかった。ただみんなが平和な怠惰と不潔な食物と無害な嘘言とに楽しく肩を叩きあっているばかりだ。(踊る地平線)

(18)恋のために身をほろぼす事「さえも」美しい。(青春の蹉跌)

(19)このわが子「さえも」顧みない気丈な養父の長女、目の前でおおらかな食欲をみせながらしゃべっている自分の妻に対してひそかに腹を立てた。(楡家の人びと)

2.4 格助辞＋「さえ」＋格助辞

格助辞＋「さえ」＋格助辞の組み合わせも可能な組み合わせのパターンであるが、実際の用例では、「でさえが」しか現れなかった。

2.4.1 でさえが

格助辞「で」＋係助辞「さえ」＋格助辞「が」の形で「でさえが」になる。

(20)たしかに、偶然の一致ということも、ありえないことではない。だが、それではまるで、合鍵のない錠前で、檻のなかに閉じこめられてしまったようなものではないか。地元の人間「でさえが」、幽閉に甘んじなければならないとすると、この砂の壁のけわしさはただ事でないものになる。(砂の女)

2.5 格助辞+「さえ」+他の係助辞

格助辞+「さえ」+「他の係助辞」の組み合わせは、「をさえも」、「にさえも」、「でさえも」、「からさえも」がある。この場合、「格助辞+さえ+も」の形に限られており、また、格助辞+他の係助辞+「さえ」の組み合わせも見られない。

2.5.1 をさえも

格助辞「を」+係助辞「さえ」+係助辞「も」の形で「をさえも」になる。

(21)責任感や義務感をたくさん持っている人間は、その責任を負いきれなくなったとき、罪を犯してしまう。要するに善良な人間は罪に陥ち易く、悪質な人間は罪を**さえも**犯さない。……(青春の蹉跌)

(22)私にはどんなに好意ある男**をさえも**恐怖させるところがあるのです。そのために女優になることは断念しなければなりませんでしたが、あなたが私の名を新聞で御覧になったとすれば、それは映画事業に關聯してではなく、遺産相続という恥ずべき、けれど甘い法律手続の客体としてではなかったでしょうか。(踊る地平線)

(23)私たちも「上品な自信」をもって周囲の華麗さに接することが出来るだろうし、誰とでもほほえみ交して最近のHITである芝居の評判を話題に上《のぼ》せられるだろうし、そうしてモンテ・カアロの中心に潜り込んでその柱石《キャプテン》たちと混合《ミキサア》し、彼らのあいだに流行するカクテルの秘密**をさえも**知り、彼等の愛好する冗句《ジョウク》に哄笑し、かれらの doings をDOすることが可能であろう。

2.5.2 にさえも

格助辞「に」+係助辞「さえ」+係助辞「も」の形で「にさえも」になる。

(24)登美子は二人の關係について男に責任を負わせようとしているらしかった。寺坂との結婚をことうった事**にさえも**、江藤に責任があるような言い方をしているのだった。(青春の蹉跌)

(25)加藤はヒマラヤのために貯金をするという秘密は誰にも話すまいと決心していた。父にも兄にも、外山三郎**にさえも**これだけはいうまいと思った。(孤高の人)

(26)アメリカでは、教授は別としても、最優秀の学生が集められているとは限らない。彼ら学生たちが、或るレベル以上に優秀であることは事実だが、同程度に優秀な学生は、アメリカ中の大学に、小さな地方大学**にさえも**、いくらでも散らばっている。(太陽のない季節)

2.5.3 でさえも

格助辞「で」＋係助辞「さえ」＋係助辞「も」の形で「でさえも」になる。

(27) どういう手入れが効を奏したのか於継の髪は染めたように黒く、一筋の白毛も見えなかった。

おそらく白いものは丹念に髪をわけて探し、見つければその都度ひき抜いていたのだらうと思いつつも、加恵のように三十歳半ばでさえも数本の白毛は抜いても抜いても生えてくるのに、美しい女というものは髪まで齢をとらないものなのかと内心忌々しく思いながら驚嘆していた。(華岡青洲の妻)

(28) 社会というものはいつの時代にも、大人たちのものだった。大人になりきらない青年たちにとっては、一種の違和感がある。肌になじまない窮屈さがある。三宅はそれを政治のためだと考え、資本主義が悪いからだ論じていた。裏街の居酒屋で酒を飲んでいる時でさえも、そのことを誰かに咎められはしまいかという警戒心があった。(青春の蹉跌)

(29) うまれた子の父が誰であるかは母だけしか知らないことだ。時としては母にすらも解らないこともある。もしも彼が、登美子の産んだ子の父であることを否定したら、問題はどうか。民法第七百七十四条には、(夫は、子が嫡出であることを否認することができる)と規定されている。法律上の夫でさえも否認権はあるのだ。それほどに父という立場は不確実なものにすぎない。(青春の蹉跌)

2.5.4 からさえも

格助辞「から」＋係助辞「さえ」＋係助辞「も」の形で「からさえも」になる。

(30) 彼は、一刻も早く自分の過去から逃れたかった。彼は、自分自身からさえも、逃れたかった。

まして自分のすべての罪悪の萌芽であった女から、極力逃れたかった。(恩讐の彼方に)

(31) 彼が、これに参与して、この企てが失敗するならば、彼は、今まで三年間、全力を傾倒してそれに向かって進んだ高等海員どころでなく、下級船員からさえもその職業的生命を奪われることになるのであった。(海に生きる人々)

2.6 副助辞＋格助辞＋「さえ」

副助辞＋格助辞＋「さえ」の組み合わせが見られる。調べた限り实例に「だけでさえ」、「などとさえ」がある。

2.6.1 だけでさえ

(32) 当時の風習として、師が生徒へ愛を告白するということは例のないものであった。しかも場所は師弟の区別厳しい私塾である。これだけでさえ画期的なのに、求愛された女性側が婉曲にせよ

拒否するというのも尋常ではない。(花埋み)

2.6.2 などとさえ

副助辞「など」＋格助辞「と」＋係助辞「さえ」の形で「などとさえ」になる。

(33)横浜外人居留地の近くに生れ、又、其処《そこ》で成育した事が何よりの理由となって、私は支那人、印度人、時には埃及《エジプト》人などとさえ、深い友誼を取り交した経験を持っている。(ラ氏の笛)

2.7 「さえ」＋格助辞＋他の係助辞

係助辞「さえ」＋「格助辞」＋「他の係助辞」の組み合わせが見られる。調べた限り实例に「さえをも」の形しか見られず、他の係助辞＋格助辞＋「さえ」の組み合わせは見られなかった。

2.7.1 さえをも

係助辞「さえ」＋格助辞「を」＋係助辞「も」の形で「さえをも」になる。

(34)わが子さえをも無視するこの崇高な魂にとっては、その夫がどのようにして敗戦後の混乱した国で慰みとはほど遠い生活を送ってきたかということなど、もとより眼中にないにちがいがなかった。(楡家の人びと)

(35)湧き起りおし寄せ周囲をどよもす爆音が、小さな思念さえをも吹きとばした。ただひたすら単純に圧倒的に、ぐっとこみあげてくる生々しい、そのくせ堅くこわばった原始的な感情があった。(楡家の人びと)

(36)彼らは、人間の「愛」には、うそにもほんともにも、沙漠《さばく》のように渴《かわ》き飢えていたのだ。沙漠にオアシスの蜃気楼《しんきろう》を旅人が見るように、彼らは「愛」の蜃気楼さえをもさがし求めたので。(海に生くる人々)

2.8 「さえ」＋他の係助辞＋格助辞

「さえ」＋他の係助辞＋格助辞の組み合わせが見られる。ただし調べた限り实例に「さえもが」の形しか見られず、他の係助辞＋「さえ」＋格助辞の組み合わせは見られなかった。

2.8.1 さえもが

係助辞「さえ」＋係助辞「も」＋格助辞「が」の形で「さえもが」になる。

(37)錨をいかに早くあげるかで、航海技術の優劣が評価できるのだが、その時も、地中海世界第一とヴェネツィア人さえもが認めるジェノヴァの船乗りの能力を、まざまざと見せつける結果にな

った。(コンスタンティノープルの陥落)

(38)そして今いる七人の中で僕が一番年少者であり、また一昨日の晩のようなことがあっただけに、僕のような者^{さえもが}仲間の中で占めている立場を、感じないわけには行かなかった。(第一の手帳)

(39)私はそういう自分自身の立つ位置^{さえもが}——あの芸術家の言い草ではないが、いつのまにか墓地のような気のして来たことを胸に浮かべてみた。(嵐)

3. 連体格のとりたて形

3.1 「さえ」＋の

「さえ」＋「の格」の組み合わせで「の格」のとりたて形になる。

3.1.1 さえの

係助辞「さえ」＋「の」格の形で「の格」のとりたて形「さえの」になる。この組み合わせは調べた限り以下の一例である。

(40)彼は、「ファウスト」第二部の音楽化という殆ど不可能な夢に憑かれていた。彼の詩は、音楽家達の(シュウベルトの、ヴォルフの、シュウマン^{さえの})畏であったが、音楽は遂にゲエテの畏だったのであろうか。(モーツァルト)

3.2 格助辞＋「さえ」＋の

格助辞＋「さえ」＋「の」格の形に、「からさえの」の組み合わせになる。この形も以下の一例しか見られなかった。

3.2.1 からさえの

(41)この"質より量"の問題を含んで、研究業績の公正な評価方法の欠如というものは、しばしばBグループからの、時にはAグループ内部^{からさえの}批判対象となっている。(太陽のない季節)

4. まとめと今後の課題

以上、とりたて助辞「さえ」の接続について考察した。それをまとめると、以下になる。

連用格 (1) 格助辞＋「さえ」；をさえ、にさえ、へさえ、でさえ、とさえ、からさえ

(2) 「さえ」＋格助辞；さえが、さえを

- (3) 「さえ」 + 他の係助辞 ; さえも
- (4) 格助辞 + 「さえ」 + 格助辞 ; できさえが
- (5) 格助辞 + 「さえ」 + 他の係助辞 ; をさえも、にさえも、できさえも、からさえも
- (6) 副助辞 + 格助辞 + 「さえ」 ; だけでさえ、などとさえ
- (7) 「さえ」 + 格助辞 + 他の係助辞 ; さえをも
- (8) 「さえ」 + 他の係助辞 + 格助辞 ; さえもが

連体格 (9) 「さえ」 + の ; さえの

- (10) 格助辞 + 「さえ」 + の ; からさえの

資料の制限もあり、十分な結果を示せたとは言えないが、「さえ」と格助辞、副助辞、係助辞(「さえ」を除き)との接続について、「さえ」の可能な接続パターン(連用格の接続を8種類、連体格については2種類)の内実を、実例から確認することができたすべてのパターンとつきあわせることで、明らかにすることはできたと考えている。そしてその結果から、とりたて助辞「さえ」について、次のようなことがあげられる。

・「さえ」には、「をさえ」、「にさえ」、「へさえ」などのように、格助辞のあとにつく場合と、「さえが」、「さえを」のように、格助辞のまえにつく場合がある。係助辞は格助辞の前につくことがないとされているが、「さえ」は係助辞として振る舞いながらも、副助辞的な特徴を持つと考えられる。

・「さえ」は他の係助辞と接続する場合、実例には「さえも」の組み合わせしか見られず、調べた限り「も」以外の係助辞と重ねて用いられることはなかった。よって、他の係助辞が「さえ」の後に来ることは考えにくい。

・本稿では「できさえ」、「できさえが」、「できさえも」、「だけでさえ」の組み合わせについて、「で」を格助辞の「で」として扱ったが、この組み合わせはコピュラ「だ」の連用形を「さえ」によってとりたてるという考えもありそうで、実例からは判断することが難しい。ただ「でも」というとりたて助辞が成立していることから、「できさえ」もひとまとまりのとりたて助辞とみたほうがよいのではと考えられるが、これについては稿を改めたい。

このように、「さえ」について、とくに格のとりたて形に限定しての考察を行ったが、「さえ」が文中において、主語、補語、述語、状況語、修飾語など文の部分や、句、節及び、今回考察の対象としなかった引用文に対して、どのような文法的機能を果たしているのか、それを解明することは、今後の課題のひとつである。

注

1 とりたて副詞について、『日本語の文法』(講義テキスト高橋太郎ほか 1996)では、「文中の特定の対象を、同類の他の語とどのような関係にあるかをしめしながら、他の同類の語群のなかからとりたてる副詞を、とりたて副詞とよぶ。たとえば、「ただ、君にだけ 知らせておく」の例で、「ただ」は、「だけ」とともに、知らせるあい手として「君」を、他の(表現されていない)「彼」とか「彼女」などの同類のものを排除する関係でとりたてている」と説明している。

とりたて副詞には、《排他的限定》、《選択指定》、《特立》、《主だて》、《例示》、《比較選択》、《類推》、《見積もり》がある。

2 とりたて助辞については、「とりたて形」、「とりたて詞」「取り立て助詞」などの言い方もあるが、本論文では『日本語の文法』(講義テキスト高橋太郎ほか 1996)の定義に従い、『日本語の文法』(講義テキスト)にあげられているとりたて助辞の低位分類係助辞「は・も・こそ・さえ・しか・でも・まで・なんて」、副助辞「くらい(ぐらい)・ほど・だけ・ばかり・など・なんか・」に限定する。

3 「格助辞」、「副助辞」、「係助辞」について山田孝雄は以下のように述べている。

「格助詞は体言又は副詞に附属してそれが他の語に対して有する一定の関係を示すもので、一の資格を示すものは他の資格のものには流用することの出来ぬものである。」

「格助詞のこの性質は分りきつた事のやうであるが、実は大切なことであつて、これを基として副助詞、格助詞との区別が明になるのである。」

「副助詞は用言の意義に関係ある語について下の用言の意義を化裁するもので、これに属するものは「ばかり」「まで」「など」「やら」「が」「だけ」「ぐらゐ」等である。

「副助詞は主語にも補語にも修飾語にも附属することの出来るもので、格助詞の下にあるを普通とする。」

(中略)「この種の助詞は又格助詞の上にも来ることがある。」

「係助詞は用言に関係ある語に附いて、その陳述に勢力を及ぼすもので、これに属するものは「は」「も」「こそ」「さへ」「でも」「ほか」「しか」等である。」

「係助詞は主として副助詞のやうに用ゐられるけれども、その支配する点は陳述の力にある。それであるからその性質によつて述語に一定の約束が生ずる。次にこれらの大部分は時として述語の下について陳述の方法に干渉することがある。」

「係助詞が係として用ゐられる時は格助詞副助詞の下にだけあつてそれらの上に行くことがない。さうして、時には係助詞が相互に重ね用ゐられることがある。」

「係助詞は格助詞を用ゐぬ場合にその代理をすることがある。」

「係助詞が格助詞と同時に用ゐられる時はその下につくことは副助詞に似てはゐるが、格助詞の上に置かれることがない。これが副助詞と係助詞との区別の要点の一である。」

「係助詞は副助詞と重ねる時には、その下にだけついて上に置かれることがない。これも副助詞との区別の要点の一である。」

「係助詞相互に重ねて用ゐるものは多くはないが、いくらかある。」

「係助詞の「こそ」は又接続助詞「ば」の下につけて用ゐることがある。」

(以上の引用は『日本口語法講義』12版によるものである)

4 以下の各形式の用例の挙げ方について、3つ以上確認できた場合はその中から3つを、また、3つ以下の場合にはその全てを提示していくこととする。これは3.連体格についても同様である。また、確認できた用例が1つのみである場合に、本文中でそのことを断っている場合と断っていない場合がある。

主要参考文献 (50音順)

奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社

川端善明・仁田義雄編 (1997) 『日本語文法 — 体系と方法』 ひつじ書房

グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版

言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論(資料編)』 むぎ書房

鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房

- 鈴木康之編（1989）『概説現代日本語文法』桜楓社
高橋太郎ほか（1996）『日本語の文法』講義テキスト
寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
仁田義雄・益岡隆志編（1989）『日本語のモダリティ』くろしお出版
橋本進吉（1959）『国文法体系論』岩波書店
宮田幸一（1948）『日本語文法の輪郭』三省堂
森山卓郎・仁田義雄・工藤浩（2000）『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
山田孝雄（1922）『日本口語法講義』宝文館
山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

用例引用資料

CD-ROM「新潮文庫 100 冊」

青空文庫